

地震津波だけでは無い 破局噴火にも備えよ

：天皇の先祖は破局噴火を体験した
：破局噴火防災で GDP アップ

国の最重要事項はエネルギー・食料・国防ですが、自然災害の多い日本では、防災も加えるべきでしょう。

そう言う地震や津波・台風が思い浮かばないかもしれませんが、日本は世界有数の火山国でもあり、当然火山に対する防災も考える必要が有ります。それも破局噴火に対する防災もです。

破局噴火とはスーパーボルケーノとも言われる超巨大噴火のことで、日本列島では人が住み着いたと思われる3万年前から現在まで破局噴火が2回起きていたのです。

一度は岩宿時代の約3万年前に始良カルデラが、2回目は縄文早期の7300年前に喜界カルデラが破局噴火を起こしました。日本列島に住み着いた人間は、それ以降起きた世界最大の噴火を経験していたのです。

喜界カルデラ噴火では火砕流は100km離れた薩摩半島と大隅半島と屋久島の宮之浦岳1936mの山頂までを覆い尽くし、降灰は東北地方南部まで及び、四国全土と紀伊半島南部では厚さ20cm以上降り注いだのです。

始良カルデラ噴火は更に凄まじく、降灰は北海道まで達し、関東北部でも10cmもありました。

このような破局噴火が「現在の日本で起きたら？」と聞くと、殆どの日本人は、「日本の終わり」と答えるかも知れませんが、それでも岩宿人と縄文人とは生き残り、現在も子孫を続けさせているのです。

それどころではありません。天皇の先祖は喜界カルデラの噴火を間近に体験した可能性があるのです。

天皇の先祖は破局噴火を体験した

古事記・日本書紀には、火山の描写としか思われない火の神や雷の神が沢山出てきます。特に天岩戸神話は、日食ではなく火山によるものと考えられる人も多くいます。

世界が闇に包まれる現象は、11世紀以降の人類が経験した最大の噴火と言われる1815年のインドネシア・スマタラ島にあるタンボラ山の噴火では、スマタラ島に居た英国人が「翌日の午後までろうそくを照らす必要があった」と手紙に書いていますので巨大噴火では起き、それに該当する神話の中の噴火は、タンボラ山の噴火と粗同規模の喜界カルデラ噴火ではなかったかと考えられます。

では、世界が闇に包まれる神話が生まれたのは何処かですが、それは上野原遺跡の有った所ではないかと考えられます。

上野原遺跡とは1986年、霧島市において発見された縄文早期から中世にかけての複合遺跡のことです。特に縄文早期のものは喜界カルデラ噴火の灰の下に埋もれ、喜界カルデラ噴火で滅んだとされています。

喜界カルデラと上野原遺跡間の距離は凡そ114km、スマタラ島がスマタラ島(バリ島)だとするとバリ島の主要都市とタンボラ山の距離は200kmと、上野原遺跡の方が暗闇に包まれる時間も長く、上野原遺跡の場所は天岩戸神話が生まれるピッタリの場所です。(図1、左参照)

それだけでは有りません。古事記の中でスサノオが天に上ったとき、山や川がことごとく鳴動し、国土が震動した箇所は、大地震の描写と考えられます。

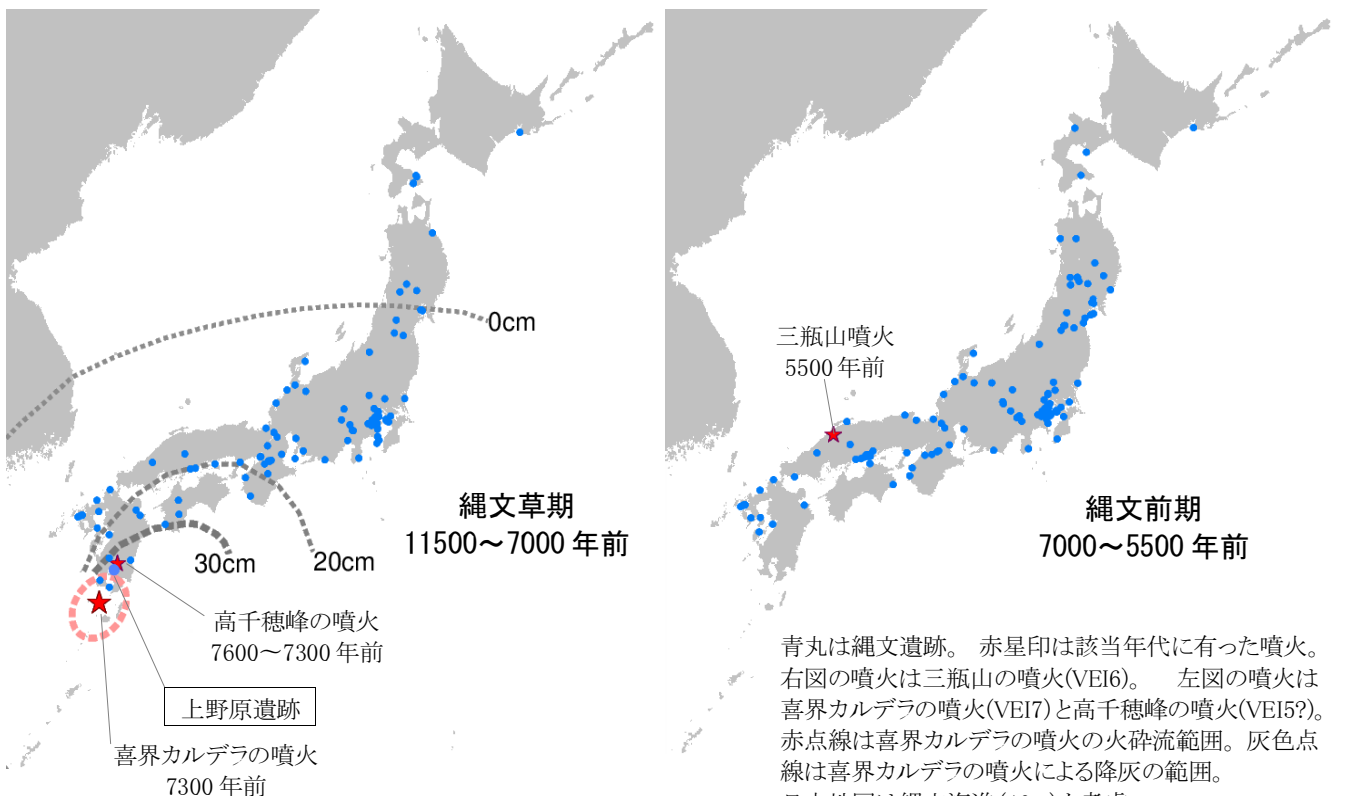


図 1

それを裏打ちするように、喜界カルデラ噴火による堆積物を調べると、最後の火砕流を伴う噴火の灰の下の地層に液状化の跡が発見され、最後の噴火の前にこの地域が激震に見舞われたことが証明されたのです。

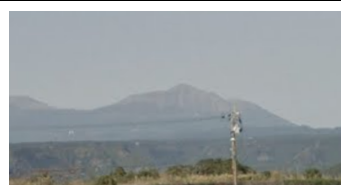
更に神話にはイザナギがイザナミに会いに黄泉の国に行くくだりがありますが、イザナミの体には蛆がたかり、ゴロゴロと鳴って、体中雷に覆われて出てくる場面があります。正に噴火そのものではありませんか(図2)。

その噴火は、高千穂峰だと考えられます。高千穂峰は7600～7300年前に噴火し、高台に有る上野原遺跡は高千穂峰の麓まで見渡せる位置にあるからです(図3)。

この高千穂峰が上野原遺跡に居た天皇の先祖、即ち天孫族の信仰の対象だと考えると、後にニニギの尊が天孫降臨の地に日向の高千穂のくじふる岳を選んだことが納得できます。



噴火に雷は付き物
図2



上野原遺跡から見た高千穂峰
図3

縄文系 Y-DNA 遺伝子を持つ天皇と縄文時代の大集落が有った上野原遺跡、上野原遺跡に近い喜界カルデラ破局噴火と天岩戸神話、高千穂峰噴火と黄泉の国神話、そして天孫降臨の地、全て繋がっているように見えます。

でも、天孫族は上野原遺跡の地から脱出出来たのでしょうか。日本神話が破局噴火の体験だとすると、それを伝える人がいたのですから、脱出出来たのでしょうか。

富士山の宝永の噴火の際、麓の須走村では3mの降灰が有りましたが、村人の死者の記録は有りませんでしたので、天孫族は降灰の少ない九州の西側を通り、九州の北の地に落ち着いたものと考えられます。

南九州と九州南東部や四国南西部は駄目ですが、九州北部の長崎県や福岡県は、喜界カルデラの噴火が有ったにも関わらず、縄文草創期から晩期まで、途切れる事無く生活が続いて地域があるのです(図1参照)。

豪雨や土石流と少ない食料、火山灰による呼吸器疾患等、天孫族の脱出はモーゼのエジプト脱出以上に困難を極めたと思われますが、それでも天孫族がそれなりの集団だったことは、その後に日本を統一を成し遂げたことを見ると明らかです。

天孫族が南九州から脱出出来たのも、人々が結束出来たのも、その後日本を統一出来たのも、大自然に畏敬を払う強い信仰と中心になる人が居たからだと思います。

上記の事は必ずしも事実では無いかも知れません。でも、縄文人が破局噴火による困難を乗り越えて生き残った例があるのに、現代の日本人が破局噴火は想定外と言って何も対処しなくて良いものなのでしょうか？。

破局噴火防災で GDP アップ

『破局噴火にも備えよ』と言うと、プライマリーバランス重視の人は「金が無い、そんな千年経っても起きるか起きないかの事に金を掛けるのは無駄である」と言うと思います。

でも3.11の東北大震災は、起きたではありませんか。結果的に多くの人命が失われたではありませんか。1人でも救出しようと多大な資金と労力を払ったではありませんか。それなら先に対処すべきではありませんか？。

これは、起きた災害に泥縄式に金を使うのでは無く、投資なのです。危機管理投資でも有り、高度な科学技術が必要な先端技術開発投資なのです。そして新たな需要なのです。

そう考えれば無駄金を使うどころか、GDPは上がり、新たな技術が生まれ日本国の資産となる筈です。

これらの利点は、それに携わる人間にやる気が起き、個々の能力が上がることです。青少年も自然科学や新しい技術に興味湧く筈です。日本の資源は人、資産も人なのです。当然投資資金は国債発行になります。

具体的には、現在行われている火山監視の強化や定期的なマグマ溜まりの測定等ですが、火砕流が到達する可能性のある地域(半径150km程)の住民の為の避難路の整備と避難先建造物の設置、火山灰で家屋が倒壊する可能性がある地域にも避難先建造物が必要です。

これら避難先建造物は津波災害や風水害による避難先にも使用することが出来るようにするべきでしょう。

又、孤立化してしまう住民の電力確保の為に、電力はリモート・シャットダウン出来る無人SMRの分散方式を選択するべきだと思います。当然太陽光発電等は以ての外。

それより何より救助体勢の充実です。パンデミックの時に病院船の話が出てきましたが、大型強襲揚陸艦や航空母艦は、建造時に想定して作って置けば病院船になり得ます(図4)。勿論物資の輸送、人員の輸送にも最大限の威力を発揮します。

救助体勢の充実とは、救助する側の人々が健康的な環境であることが絶対条件です。3.11の時の自衛隊員が、消臭剤が欲しいような事は有ってはならないのです。

これら設備・装備は国防にも寄与し、あらゆる災害にも有用になる筈です。と言っても此処に掲げたのは一例です。火山被害は広範囲の故、更なる充実が必要です。

でも実際に破局噴火に遭遇すれば、縄文人と同じく荒魂・和魂・幸魂・奇魂を祀る事になるかも知れませんが。



病院施設と耐熱及び火山灰に対する密閉構造と灰を洗い流す設備を施した大型強襲揚陸艦型船や航空母艦は極めて有用。動力は原子力で35ノット以上の速度が必要。

火山灰対策の為、使用する航空機は電動型の開発が必要。

図4